

佐伯史談

第百一号

「郷土史研究」誌
通算第百二十三号

昭和五十年七月二十八日発行

佐伯史談会

事務局 佐伯市大字箱根龍護寺 羽柴方

論説

「佐伯史談」の現状と今後

郷土研究誌としての課題と努力の方向

佐伯史談会（幹事兼務）

副会長 羽柴 弘

「佐伯史談」が、十年間に百号の積み重ねを達成したことに對し、各方面の皆さんから賞賛祝福をいただき、各新聞が殆んど記事にしてくれ、とくにNHK（大分）がこれをとり上げて、高木会長と私がテレビに出席放映ということがあった。

なる程、十年間コツコツと鉄筆を握ったこと、毎回何千枚の印刷したこと、この永續させたことはよかつた。そして、捨つて、綴じて、封筒に入れて祭送、配付することについて、多数の会員の協力もずつと預いている。中には河野典一氏のように、もう七くなられた方もあつて、追慕の気持ひとしおである。河野氏も地下で喜んでいられるであろう。

しかし何といつても、よく研究し、よく勉強する会

員があつたればこそである。それも原稿紙にははじめてだという不馴れの方も、あえて卑下なまじらず、また投稿定連の方も、決して高ぶつた思ひでなく、郷土の現実をよくふまえて、實際の資料にもとづいて記録するといふ、いづれに至極む及なとり組及びつづけられたことを、私は高く評価したい。

県下には私どもの史談会のように、郷土の歴史や文化財などと取組んでいゝる研究団体は多く、それぞれの地域でみんなよい働きをしてゐる。昭和三十三年三月、佐伯史談会は避れ、世ながらその流れにたまり、大分や臼杵や、野津・三重・竹田、遠く日田の先輩の方々のお手引をうけてここまでき成長した。その中には立川先生や土生先生、増村先生のように、すでに物故さ

本号の内容

- 論説 「佐伯史談」の現状と今後（羽柴弘）……一
- 逸話 小学校と披里（栗原工藤好美）……三
- 逸話 佐伯小学校の周年（宇野）……一
- 逸話 佐伯風土記（山内武藏）……五
- 賞番 箱根の大森（安部弥右衛門）……九
- 賞番 屋形島の大森と住留（羽柴弘）……三
- 逸話 元田氏の獅子に当つて（市野廣三）……五
- 逸話 赤木柳蔭共有林（尾谷捨次）……五
- 〃 すばらし、雪見灯籠（羽柴弘）……六
- 逸話 横川先生と佐伯（山本 保）……五
- 逸話 三つの地区集会の記（……）……三
- 賞番 湯州佐伯村の寛文書（矢野隆徳）……五

た方もいらつしやる。ご冥福をお祈り申したい。

今、佐伯史談会は、普通会員二二〇名、賛助会員一三六名、客員・会友六〇名、合せて四一六名、会誌の発行四五二部という現状である。これらの会員は佐伯地域（佐伯市及び南海部郡八ヶ所^附）はもとより、県下各地から遠く近畿・東京都とその周辺まで、かなり広い区域に亘って読者氏散在している。

その拡がりはいよとして、文字通り十年一日のようには、薄ぺらな、粗末な謄写印刷。その見ずばらしさにわれながら肩身の狭い思いであるが、それなのに見捨てませんで読んで下さることは、ありがたいことである。百一号もこの通り、ごらんの方である。「お前、やっぱりこのままで押し通すつもりか」と問われている気がするのでもかことにふれておこう。

今にはじまったことでもないが、百号で次にバトンと渡そうと随分考へましたし、印刷と活版がタイプにするとか、高能率の印刷機器を導入するとか、かなり検討してきたが、史談会の研修活動と事務運営と機関誌発行の三者一体、効率高いとり違めは、このままの方が最もよいと思われ、私^私のしんでやっている限り「佐伯史談」の発行は、まだまだつづけられそうである。

この反面、「佐伯史談」編集その他、私の独断、独走、私物化の傾向を生じそうで、この点ばかり自省、自肅しているつもり。とにかく現状をふまえて、私なりにも多数会員の怒意があると、ろと汲み、次のような抱負や期待をもちている。後惜のないご意見が伺えれば幸いであるし、一層のご協力をお願い申したい。

史談会の研修は、わが郷土に対する愛情が根本である。例え佐伯市の山内氏、山本氏、鶴見の安部老、弥生の小野氏、渡谷氏、蒲江の富沢氏のように、それぞれ書か

れる内容が異なるが、それぞれ地域の、今日の時勢にほそび去ろうとしている過去の歴史や文化や習俗をいとおいみ、先祖方々の姿を忘却や滅失から守ろうとしているのではないか、その愛情にまねがたいものである。次に私どもは、足が地についた勉強をしたい。理論や観念をもちおそぶのでなく、実地を歩いて実物や古文書資料などにより、その裏にひそむ昔々の人々の、切実な生活の姿をとらえたい。

それから、私どもは会員数の多いことを誇りとすまい。各地区会員同志、むしろ少人数が相憐れり相励まし、相携えてそれぞれ研修をすすめる、その成果を互いに交換しようではないか。その総括した姿が、この「佐伯史談」ということにしたい。

「佐伯史談」は、佐伯史談会の機関誌である。だから誌上にすべての研修活動を反映して行きたい。紙面には元佐伯の、ふる里の歴史や民俗や文化執などについての、皆さんそれぞれ、追次の成果を発表してほしい。ご遠慮なく、普通の便箋でよし、且がきでも結構。短かくても資料は物を言う。貴重なものになる。

これらのためには当然費用がいる。だから「佐伯史談」の発行はなるべく安上がりで押さえ、研修費にまわそうとしていく。まだ怠っている方には、本年度、前年度の会費納入方のご請求を申し上げます。この点賛助会員の方々からの、ご寄付はまことにありがたい。もしこのようなおことに熱意をおもちでなくなつた普通会員の方へ、ご退会、またはしばらく休むこと結構、ただしご一報下さるよう。

このようにして、いつも清新の気をもつて、この路線から外れることなく、堅実に初心を貫きたいと念じている。ご支援をお願いする次第である。

(以上)